

江戸・東京の都市景観形成原理に関する考察^{*}
A study on formation of the landscape in Tokyo

北河 大次郎^{**} 篠原 修^{***}
By Daijiro KITAGAWA, Osamu SINOHARA

This study constitutes a review of books written by foreign residents and visitors to Edo prior to and following the Meiji Restoration. Three key words essential to the formation of Tokyo's landscape are identified in this literature ; element, movement, and code

Each key word is observed from Edo to Tokyo inclusively, and while the meaning and use of each word remains fundamentally static, some changes are noted.

1. はじめに

(1) 背景と目的

「多様さと乱雑さ」「活気と騒がしさ」「刺激と落ちつきのなさ」。東京。同一の風景に対し、多義的印象を与える町。混在の中に曖昧な秩序を感じさせる町。景観設計において日本のオリジナリティーが求められる今、この表面的な姿に惑わされて町はますます混沌を深めている。現在の東京の姿の良否さえ満足に判断できない我々に今必要なのは様々な現象に覆い隠された、この風景の本質を明らかにすることであろう。そこでこの東京の多義的姿が現在のみの特徴なのかという点に着目し、江戸・東京風景形成において時代を通じて不変の基本原理を探り出すことを目標に研究を行った。

(2) 本論文の特色

本論文は都市景観の計画論、手法論の研究ではなく、風土論・都市論の整理・考察、特に外国人によって書かれた日本風景論、日本人論を取り扱っている。同種の研究としてはタウト^{a)}、ベンチュリー^{b)}のように差異に敏感な目で発見した日本人には見えない具体的な事例を、それぞれに考察を織りまぜながら記したもののや、バルト^{c)}やベルク^{d)}のようにその差異の意味するところを深く考察しある日本像を浮かび上がらせたものなどがある。そこで本論文は前者のタイプの文献を材料にして後者のような統合的考察を試みたが日本人の目をそこに挿入することで、更に人々の感情の深層に踏み込むことができたと感じている。

(3) 対象と方法

時代としてはできるだけ過去に遡りつつも文献の数・信憑性も考慮した結果、幕末期の江戸が最適と判

^{*}「ワード」江戸・東京、景観形成原理、風景の多義性

^{**}正会員 (株)プランニングネットワーク

(〒114 北区田端新町3-14-6)

^{***}正会員 工博 東京大学教授 工学部土木学科

(〒113 文京区本郷7-3-1)

断した。そして記述内容あるいは著者の文化的背景の多様化を意図しながら、その時期に來日した外国人の文献を選んだが、考察にまとまりを失うのを恐れその内の13に絞った（巻末に列挙）。

以下本論文の流れ。まず著者を滞日期間で2つのグループ（1868年前後）に分けてから49の場

所に関する294の記述を表1に示す2つの軸で整理し、同時にこれらの風景描写に付随する彼らの考察を構造化した。そしてこれらの客観的手続きを下敷にして、不易の要素をキーワードとして切り取り、江戸・東京風景を読み解いていった。

表1 整理の枠組

	立地	西	道	川	池	庭	建物	人	風景
城									
屋敷町									
寺町									
町人町									
宿場町									
名所									
郊外									
全体									

2. 外国人の見た江戸・東京風景

(1) 記述整理の結果

紙面の関係上、考察の構造化を省略し、風景描写の記述整理の要旨だけを示すに止める。

表2 土地利用別の風景のまとめ

江戸全体	自然に囲まれた都市 仮想的で清潔な都市 遠望が単調で近景が多様
城	地形的・象徴的中心 壮大・神聖・厳格 自然に潜む簡素な秘宮
屋敷町	静けさ、閉ざされた門 低層で単調な町並み 整備された直線の道
町人町	ひしめきあう家並みの多様な表情 道に開け放たれた家 行き交う人々の混沌なき賑わい
宿場町	24時間都市 単調に続く茶屋と家 旅人による賑やかさと武士による緊張
名所	豊かな自然と陽気な人々 混在（宗教・娯楽、町人・武士・大人・子供）
郊外	豊かな自然と良く整備された畑 都心との曖昧な境界

(2) まとめ

1で示した東京の多義の様相に通じる明治維新前後の江戸・東京の風景は「多様だが調和していて、賑やかでありながら秩序がある」とまとめられる。だが十分に整理できていないまま、ただ漠然と町の魅力を感じているに過ぎなかった外国人達の行った考察は断片的なものに止まっている。そこで、彼らの様々な考察からその根底に共通している要素をキーワードで示し、それをもとに以下3～7で江戸・東京風景を包括的に捉える考察を試みることにする。

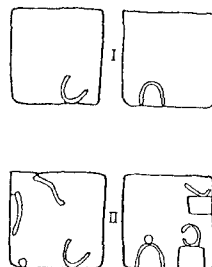
3. キーワードの概説～点・動・約束～

物の「点」的配置は高度な操作性「動」によって促進され、その行為によって空間は複合的・多義的になっていった。しかしそこに混乱がなかったのは、「動」による淨の感覚と「約束」の視線によって共主観的秩序が与えられていたからであった。

「店で売る品物を陳列する方法は多く簡単で且つ面白い。」^{1) p20}

吊るす、地に直接置く等多く指摘されていたディスプレイ方法に於る日本らしさを「（家具を置かない室内で）畳は家具の役目を務める。」^{2) p83}という室内の特徴と結び付けて考える。

図1 物の配置-2つのタイプ①
A (江戸) B (西欧)



内部空間において置物

(4(1)①に示すタイプの「点」)の数が増えていく時、天井の低い室内で靴を脱ぐAでは天井・壁にひっかけたり床に直接置いているが、Bでは直接的な接触を避けるために置台を作り出している(図1・IからIIへ)。そして食事の時には、Bでは専用のテーブルを置くための場を新たに作るが、Aでは場を片づけてから、卓袱台を設置する(III)。寝る時にはベッドでなく、

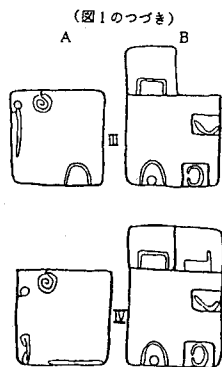


図2 物の配置に有効な面

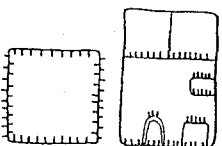


表3 特徴の対比(図1, 2)

移動-固定
場の共有-一場の占有
状況創造-一場の創造
空の空間-充の空間

図3 物の配置-2つのタイプ②

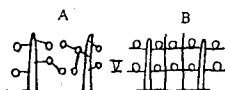


表4 特徴の対比(図3)

主観的-客観的
動的-静的
時間に乗る-時間を見据える

先と同じ空間に布団を敷くことで寝室へと変化させている(Ⅳ)。

つまりBでは各機能に専用の場を固定しているが、Aでは限られた空間を共有しながら必要に応じてものを出し入れし、その場その場に適応した状況を作り出している。(「動」)

ここでⅢⅣの片付けに注目すると、専用展示スペースが専用収納スペースになっているBに比べ、Aでは仕舞うといっても、ただ端に置いたり、置く方向を替えてあるだけで目に見えることにならなかった。そこには物が仕舞ってあると認識するための「約束」の視線が存在していたのだ。

これは別の見方もできる(図3)。予め2本の棒(空間形成の拠り所)しかない空間に物を置くと、Aなら図1-Ⅱで天井・壁・床に対してそうしたように棒に直接くっつくだろう。Bは各々の専用スペースのために、柱と柱の位置関係、物の総数等の全体的把握のあとに場を構築するはずである。

つまりBでは静的な状態を基本とするために、全体の枠組みの中に物(「点」)をはめ込んでいくが、時間の共犯者となって物の付け足しによる絶えざる変化(「動」)の状態を基本とするAにおいては、物の境が曖昧なためその空間は必然的に多義的になっていった。

屋内のディスプレイに見られるこれらの特徴は町

中に溢れる物の置き方、さらには建物の配置にまで通じるものであった。

4. 点

(1) 結論

①「独創性のある通りなどは一つも見つけれない(...)通りを区別するには、道にまではみ出た店の佇まいやそこで売っている物の種類によるより他ない」³⁾上p68

江戸の町の表情は建物自体の静的な形というよりむしろ頻繁に入れ入れされる様々な「点」によって形作られていた。

②「幾つかの界限には、規則的な通りを作っている家々の途切れることのない連続がみられる。しかし目を移すたびごとに、寺院や庭園や屋敷が町並みの統一性を壊しにやってきて(...)あの特異な様相を作り出しているのである。」⁴⁾p172

点的配置は町全体にも拡張していた。つまり土地利用のフレームの中に「点」としての建物が全体の関係性を見ないまま自然・地形・土地の個性に引っかかっていた。

③「公園、河川、荒涼とした草原、鬱蒼とした木立に出会うし、全く静かだと思えばその側には活気に満ちた町並みのめまぐるしい動きがある。」⁵⁾p231

本来個性を持つ各点の上に更に「点」が勝手に引っかかることで、空間は非常に複合的・多義的になり厳格な境界なき町並みに界限や重層的空間が生まれた。

(2) 点の具体例

(以下、引用文は主なものだけ示す。)

表5 点とその引っかかり棒(拠り所) (4-(1)①②③に対応)

点	拠り所	茶店 蕎麦地 門 ^a 道 家	自然、寺 ²⁾ 下p270 自然、地相 ²⁾ 上p230 道、門 自然、道 ¹⁾ 上p245 自然、地相 ²⁾ 上p307
①坂側 欄、提灯 鉢植 水槽、梯子 ^a	軒先 ⁶⁾ 上p9 道、イベント ⁷⁾ 上p84 道、季節 ⁸⁾ 上p254 道、家		
②寺 ²⁾	自然、地相	③祭・市・露店 遊び場	寺、道 ⁴⁾ p167 寺、道 ³⁾ 上p233

* a 「水を満たした木製の水槽やピラミッド形に積まれた桶が、商家の店先や通りの歩道の端の先など所々に置かれている。」²⁾上p12

* b 「日本の神社仏閣は、例えば溪谷の奥、木立の

間、山の頂上というような最も絵画的な場所に建っている。」^{1)上p43}

*c (城壁の一部として町を取り囲むものではなく、内から外に付け足し可能な門。)

豊かな自然・土地の個性が、家の多くの柱・低い天井と同じ役目を果たし、町中の点的配置を促進した。

(3) 点の性質 (図5参照)

- ・各々個性を持つ。
- ・内から外に向かう主観的視線によって関係性を見だし引っかかる。
- ・場の変形・構築をほとんどしない。
- ・その場主義的付け足しによって空間を動的にする。
- ・個体間の不明確な境界によって個性が重なる。

(4) 点の調和

記述のほとんどで町中の多様性が肯定的に語られているのは、付け足される「点」の中に秩序が存在していたからである。5、6でそれについて詳述するが、ここではより基本的な理由を幾つか挙げる。

①点の同質性—形(寺^{10)上p179}、家^{1)上p61})

—色^{8)上p75}

②点の力の弱さ—簡素さ、小ささ^{6)上p4}、地味さ^{6)上p61}

③点(建物)を隠す自然^{9)上p67}

④土地の枠組みの存在(2-(1)参照)

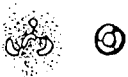
(動的風景の下にはやはり静的枠組が存在し、更にそれらの画一性が秩序を与える要因となった。)

これらを(2)のひっきり棒と照らし合わせると、調和をもたらしているものが同時に点的配置を促進していることがわかる。

(5) 複合化(4-(1)③に関連、6-(2)③で詳述)

「点」の発する影響力

図4 空間の複合化
A B



(A (点部)に引きつけ
らくつった「点」たち

(B部)はその影響力を立
体的重ね合わせることで多

義的な空間を作っていた。そ

れが界隈、重層的空間の実態である。またその「点」は、見える物に限らず(3)③で示した非物質の

「点」も含む。(労働・生活・芸術・宗教の複合)

5 動

(1) 結論

①「あちこち歩き回ってもあきないのはどういう訳だろうか。それは都会がその貧しい小さい家の単調でありふれた外観の下に、限りない変化を与えているからであり、またそこで人に知られぬ絵のような何かの場所を毎日見つけることが出来るからである。」^{3)上p69}

自然を極度に変形せず四季の流れに身を任せた日常的な生活空間の演出、火事・地震による町並みの変化、町中への頻繁な「点」の付け足しといった様々なサイクルを複合していた江戸は動的で即興の風景をもつ町だった。

②「日本の国民生活のもっとも著しい特徴ともいえるべきものは、極度の流動性である。(…)1点から1点に動く移動は微弱であるが西洋人種の移動に比べると、ずっと幅が大きく変化に富んでいる。しかも、たいへん自然だ。」^{6)上p209}

町並の「動」の日常化はアイデンティティに対して無自覚な人々の時の流れと共に生き、動くこと自体に快楽を感じるという性格によって可能だった。またその人々の一見乱雑な動きには秩序があった。

③点的配置に調和・秩序があった原因は、「動」による浄の感覚、日本人の性格にある。

(「点」に秩序を与えていた「動」による浄の感覚を考えるために、(2)空間の動、(3)人間の動に分けてこの「動」の姿を明らかにする。)

(2) 空間の動(5-(1)①③に関連)

①点の出入れのサイクル(4-(2)参照)

毎日—暖簾、提灯 イベント—幟、露店
天災—梯子、建物 四季—花見、祭、鉢植

「こういう人生の送り方は、微妙な外面からみるのではなく、時、日、年の連続であって、一言でいえば、瞬間の影響のもとで生き続けることであり、…」^{2)上p86}

「動」とは「点」の出し入れのことだ。そして、この具体例から町の多様性は「点」の出し入れの様々なサイクルの重ね合わせによって生まれていたこ

とがわかる。また生の素材を使い、メンテナンスをせず鄙びた感じを楽しみつつ、壊れたら素早く作り直すという日本人にとって、風化という一過的と考えられているものさえ、あるサイクルで循環するものだったのだ。(5-(4)①に関連)

②動的風景の理由

(i)天災の多さ^{9)上p202}

これは点的配置を促す原因であった。

(ii)永久保存を考えずにものを作る

「西欧人は永存のために家を建てる。日本人はほんの一時的のぎのために建てる。(…)日用品などでもまず長持ちさせようという考えで作られているものはめったにない。」^{6)上p207}

これは天災にする諦め^{9)上p282}、更に天災による建物の破壊の期待(「彼らは(…)7年ごとに全市内が再建されることになる」と予想している)^{9)上p202}が大きく関係している。

(iii)新奇な物への好奇心^{1)上p240}

物の善し悪しを判断しないで、とにかく受け入れた後にそのことを考えるという傾向があった。これは、「点」がひっかかることへの寛容さと言うこともできる。

(iv)装飾性^{1)上p21・娯楽性^{3)上p74}}

図5 物の配置-2つの流れ③

自然の素材を生かした、質素で広範囲の加工を施すのが習慣だった。そして、豊かな自然と煩雑な地形を持つ土地で、あく迄も全体の関係性から場を構築するためにその複雑さを破壊するのではなく(図5-B①)、逆にその多様性を利用して自由にひっかかっていた江戸の都市形成(図5-A)とは自然の特徴を際立たせるための絶えざる装飾・加工の結果と見ることもできる。そしてこれらは、娯楽の場、また楽しみそのものを広げる為の舞台作りでもあった。

(3)人間の動(5-(1)②に関連)

「(火事の翌日)あちこちに新しい建築の枠組みが立てられていた。その進行の早さは驚くべきものだ

った。(…)彼らはとても進取の気性に富んでいるのだ。」^{7)上p141}

動的風景の5つめの理由とも云える高度な操作性を考えるために、4つの「動」と、それを誘う要因と増幅する要因に分けて整理したが、ここではその1例を挙げる。

①動き

・町人町の賑やかさ^{3)上p70}

(名所・祭での賑やかさ^{3)上p87}、河・海にひしめく舟^{1)上p115}、頻繁な旅^{3)上p273})

②誘う要因

・機能を多く持たない狭い家^{2)上p83}

開かれた家

「通常一階は(…)開け放たれている。(…)日本人は野外で生活しているも同じである。」^{4)上p186}

③増幅させる要因

・道行く人々の多様さ^{4)上p186}

・様々な音

「下駄の音、荷牛・乞食の鈴の音、人足の調子をつけた叫び声、運河から立ちのぼる定かではない物音。このような騒音が一緒になって他の都会には類を見ない奇妙な諧調を醸し出す。」^{2)下p39}

④まとめ

人々の動きは目的地に達する為の単なる手段ではなく、むしろ動くこと自体を目的としていたと言える。動くことに何か強制的なものを感じ、歯車のように周りの流れに身を任せて、その場その場を消費していたのである。つまりじっと立ち止まって心の深層に踏み入ることで己のアイデンティティーを考えることなく、時々刻々と身の周りの環境や自分の位置を変化させることで、無意識のうちに自らの存在を確認できた彼らにとって、点的配置の付け足しによる場の小刻みな変化が、まさにうってつけだったのだ(6-(3)⑤で詳述)。また、その無自覚に動き回る人々自体(また街灯の代わりに各々が提灯で明かりを作り出すことでさらに)点的動的風景として町中の重要な要素だったと言える。

(4)点の調和(4-(4)の続き)

①「動」による淨の感覚

物の出し入れの様々なサイクルを複合していた環境にあって、不変的なものへの信頼感の欠如(5-(2)

②(i)(ii))の裏返しとして、今止まっているものも直に動くはずだという信頼感が存在していた。つまり、雑然としていても何かしら変化(「動」)が起これば(6-(2)②で詳述)、その空間は全く新しい様相に生まれ変わったと認識していたのである。

②日本人の性質

(i)礼儀¹⁾ 沖 p89, 3) p265

単一民族等による反発し合わない個性、受け身の「動」によって賑やかさの中にも混乱はなかった。それはまた「動」を止めないための表面的潤滑油でもあった。

(ii)協調(仏教の影響) (6-(2)③で詳述)

「全てが外部の世界と即座に協調して終始してしまうのである。」²⁾ 上 p85

局所的ではあったが周りと溶け込み、調和しようとしたため、全体的構成を無視した「点」の付け足しが可能だった。

6 約束

(1)結論

①「彼(黒子)は、見えないことになっている。(・・・)我々としては、彼は俳優達と少しも違わぬ程度に顕著だった。」¹⁾ 上 p27

仕舞った状態と出ている状態の曖昧な違いの識別には、選択的な物の見方—「約束」の視線—が必要で、それによって複合的空間は局所的秩序が与えられた。

②「(無数の幟や暖簾には)日本の文字か中国の文字が書いてあり、(・・・)世にも珍しい美しいものになっている。が、初めて見る目にはそれはごたごたした楽しく異様な景色に見えるにすぎない。」⁶⁾ p4

町の表情を構成する様々な「点」を常に見える状態で出し入れしていた江戸の町はディスプレイの町であった。

(2)約束の例

①思考を働かせないことによる約束

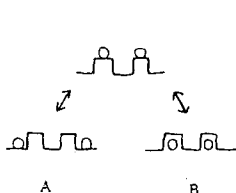
「我々としてみると、(額に)書かれた言葉が国民にとってそれほど意味が不明瞭であることは大いに不思議である。」¹⁾ 上 p48

漢字が掛軸、看板、幟によって町中に氾濫しても⁶⁾ p4、その難解性または絵画的・完結性・自由な方向

性のために、意味を深く考えずに、絵のように眺めていたので、その風景にさほど乱雑さを感じなかった。

②多義的空間で見たままで仕舞っていると認識する約束(図1Ⅱ←→図1ⅢⅣをさらに図式化)

図6 出し入れに於ける約束

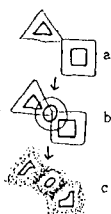


Aでは(入)も(出)もたいして違いはない。場所は移動したが見えたままである。しかし、たとえ客観的には乱雑な空間にいても「約束」の視線によって秩序を感じていた。又、この様相の変化に対して「動」による浄の感覚が働いていたのだった。

③外部との協調の時に見られる「点」の自己変容における約束(図4を時の経過で3段階に分ける)

「そうした境界の魅力は、輪郭というより色調にあった。」¹⁰⁾ p139

図7 点の自己変容に於ける約束 予め「点」の影響力によって



空間の性質が決められているところに(図7-a)、重なり合うように異質な「点」が付け足されるとき(b)、外部との協調に終始する「点」たちは、この空間の調和された新たな姿を雰囲気として共有し、なんとなく自分自身を変容する(c□か5□)。

その時、「点」の影響力の境界はなくなり明確な輪郭というより、重なり濃淡によって場の性質は決められていく(c部)。

そして、いざ「点」を取り出そうとする時には、

○部だけを純粹に取り出すのではなく、¹⁰⁾ p139 という形で周りをも一緒に取り出してしまふのである。

この雰囲気を読みとる目と、複合的な形で点を取り出しても無意識のうちに全て一緒にくたに利用してしまう目が「約束」の視線である。

(具体例)祭・市・遊び場

専用の空間を持たないこれらの「点」が、寺・道にひっかかった後、いざ自らの機能を果たそうとする

時、寺・道が本来持つ機能もくつつけたまま、一緒に楽しんでもしょう。

(3) 約束を可能にするもの

「点」の調和をもたらす「動」による浄の感覚の根底にある「約束」の視線を可能にするもの。

①村社会体制¹⁰⁾ p140

不文律での統治、暗黙の諒解を可能にしたのは民族の単一性による、感情・文化の共有であった。

②空な空間の維持⁹⁾上p288

屋内生活において1つの空間で食事・就寝することに混乱がなかったのは、物を固定せずに畳だけの空(簡素)な空間を常に保とうとしたからだ。これは屋外についてもいえる。つまり、幟、仮設的な家、メンテナンスをしない装飾物といった「点」を出し入れする、単調で清潔な道・境内・川といった畳だけの空間が存在していたのだ。

③表面的な「動」⁹⁾上p228

「将来にわたる恒久的な利益よりも、一時的な利益を重視している。」⁹⁾上p228

必要に応じた小刻みな動きが、根元的変化をカバーしていた。(図6)のAの変化は表面を滑らせただけの僅かなものに過ぎず、(図7-C)でも、新たな「点」が加われば、容易にまた自己変容を起こすことができるという、表面的で一時的なものだった。これは換言すれば、いつでも動くことができるという意思表示を常にしているということである。

つまり、歯車的な「動」によって、人々は「矛盾した約束事の視線によって、秩序を勝手に感じているだけだ。」ということに気付かないですんだのだ。電車で座っている人が周りの風景を見ないかぎり、自分が動いていることに気付かないように、矛盾から矛盾へと常に動き続ける人々は、立ち止まって現在の状況を冷静に考えさえないければ、その矛盾には気付かないのである。

7 幕末と現在—そのつながりと変容

現在の東京の風景形成の根底にこの「点」・「動」・「約束」を読みとることができるだろう。例えば町並みに「点」が勝手に組み込まれても、その風景が一時的なものとして認識する「動」感覚と不調和を感じまいとする「約束」の視線が、そういった新しく付

け足される「点」たちへの寛容さを生んだとはいえないだろうか。しかし、幕末、外国人によって肯定的に語られたこの多様な風景は現在必ずしもそう受け取られていない。人々の「点」への寛容さが「点」の付け足し(風景の変容)に対する無関心という否定的意味で捉えられているのだ。

そこでここでは現在の状況が生み出された原因を考えるために、いくつかの例を挙げてみた。

表6 点・動・約束の変容

変容したもの	幕末	現在
町の表情を作る「点」	幟、幟、建物に立てかける荷車	片付けない幟、ポスター、雑然と置かれる自転車
「動」への信頼感を、裏切る「点」。動くことをやめた「点」は、「約束」の視線を不可能にさせ、町を雑然とさせる。		
「点」の性質	小さい、ひかえめ	巨大、差異を主張
かつて付け足していく事で補完しあっていた「点」が、バランスを整えるどころか、新たな付け足しを拒否するほど巨大化してしまった。そして建物に固有のメッセージを内包する事を忘れない設計者たちが、「動」・「点」であることとすでに多様性を持つことに無自覚なまま、活気ある秩序に止揚しようと勝手な論理で局所的秩序をつくりだす。		
空間の枠組み	明確に存在(**土地利用別一表2)	弱体化(「点の巨大化で相対的に力失う。)
「点」の変容・移動速度の増大等による、個性のない景観の連続。		
「点」の拠り所	自然、土地の個性	(図8)
くっつくことで自然を演出していた「点」が、拠り所なきまま勝手に置かれることで、自然・地形は見えにくくなった。		
常時存在する町中の動的な「点」	罹災した建物 ⁹⁾ 上p202	工事中の建物
自然の力(地震・火事)で「出」された(破壊)のを、ただ「入」れる(建設)だけで成り立っていた動的風景の伝統が、「出」「入」の両方を人の力ですることで現在も守られている。		
「動」を増幅する音の質	行商人の声、人夫のかけ声、がまの油売り、駕籠もちの声、辻音楽師、下駄の音	ちり紙交換、右翼の車、バーゲンの売り子、駅のアナウンス、スーパーの有線放送
口調・声色の「約束」を守った音に対する寛容さが、音の質の変化した現在にも受け継がれ、町に雑音はばばる。		
周りとの協調の質	個人的でミクロな協調	町単位のマクロな協調
かつて多様性の中の調和をもたらした、個々の自己変容という性質を持った協調が町レベルの大ききで見られるとき、どこに入っても同じ様な町並みしかないという現象につながる。		

図8 点的配置の過去と現在



8 課題

この3つのキーワードの時代に対する不変性を確認するために、今回の幕末期をきっかけとして大正、昭和あるいは江戸初期、安土・桃山と時代を広げていくとともに、海外を含めた他の都市についても調査を広げ、東京の新たな特異性を見つめだす。

調査文献

- 1) E. S. モース (石川 一訳) 『日本 その日その日』平凡社 1971
- 2) A. アンペール (高橋邦太郎訳) 『幕末日本図説』雄松堂書店 1969
- 3) G. プスケ (野田良之訳) 『日本見聞記』みすず書房 1977
- 4) R. リンダウ (森本英夫訳) 『スイス領事の見た幕末日本』新人物往來社1988
- 5) F. レガメ (青木啓輔訳) 『日本素指紀行』雄松堂書店 1983
- 6) 『小泉八雲集』筑摩書房 1970、より『日本瞥見記』(p3-135) 『心』(p200-242)
- 7) K. ホイットニー (一又民子訳) 『クララの明治日記』講談社 1976
- 8) F. オイレンブルク (中井昌夫訳) 『日本遠征記』雄松堂書房 1969
- 9) R. オールコック (山口光翔訳) 『大君の都』岩波書店 1962
- 10) メーチニコフ (渡辺雅司訳) 『回想の明治維新』岩波書店 1987
- 11) H. ヒュースケン (青木枝朗訳) 『日本日記』岩波書店 1989
- 12) E. サトウ (坂田綱一訳) 『一外交官の見た明治維新』岩波書店 1960
- 13) E. ギメ (青木啓輔訳) 『東京日光散策』雄松堂書店 1983

参考文献

- a) B. タウト (森 郎訳) 『ニッポン』講談社学術文庫 1991
- b) R. ベンチューリ、D. S. ブラウン (高垣健次郎訳) 『建築とデコラティブ・アーツ』鹿島出版会 1991
- c) R. バルト (宗左近訳) 『表徴の帝国』新潮社 1974
- d) A. ベルク (篠田篤英訳) 『日本の風景・西欧の景観』講談社現代新書 1990
- e) 北河大次郎 1992年 東京大学卒業論文